

究極的関心

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第134回から137回が、親鸞仏教センターに於て、対面講義、及びオンライン配信のハイブリット形式で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、質疑応答がなされた。ここでは、その第135回から一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

『大無量寿経』に、『真宗聖典』（東本願寺出版）で言いますと83頁に、「仏智を疑惑するをもってのゆえに、かの宮殿くでんに生まれて」、そしてその少しあとに「もしこの衆生、その本の罪もとを識りて深く自ら悔責けしやくしてかの処ところを離れんと求めば」とあります。親鸞聖人が『教行信証』の化身土の巻で引かれているところです。

光の世界の中に、快樂に埋没するというような在り方をしてしまった場合には、五百年という年月を、仏法を聞くという生活からすると無駄に過ごしてしまうと言われる。楽しみを、快樂を人生の目的とするならば、五百年も楽しい世界にいられるということは価値があるとも言えるわけですが、それは結局、有限の世界に囚われて、有限の楽しみに埋没する。究極的目的がわからない。

ティリッヒ (Paul Tillich 1886-1965) という方が、アルティメット・コンサーン (ultimate concern) ということを言うのですが、究極的関心のことです。「究極的」ということは、人間が感じたり、考えたり、求めたりする、相対的意味や価値、楽しみとかではない。究極的なるものに気づく、目覚めるということですが、なかなか目覚める因縁に恵まれるのは難しい。けれども聞法関心に出会うということは、結局、この究極的関心に触れるということなのです。相対的価値に満

足するというのは、この世の意味、人間として有限の命の意味を有限に意味づける。人と比較したり、自分の意味というものをこの世の有限の形の中に意味づけたりしようとする。そういう営みなのですけれど、それは結局、自我、自分ということに囚われて、自分の相対的な意味づけに走ってしまう。そういうことは人間にとってある意味で虚しい。相対的に何かこの世で自分にはこういう体験があったとか、こういう価値を生み出したのだとかということで、自分を意味づけようとすることの虚しさ、そういう思いが湧いてくる。

だから、そういう思いを越えて、本当に満足できるものは何だと、こう問い直したときに、「本の罪を識りて深く自ら悔責して」ということがある。我々は如来の智慧を疑惑している。大悲の智慧は、有限の知恵に対して、何か頼りないと言いますか、我々からするとよくわからない。この自分に執着する、自分の有限なる因縁に執着する。しかしそういう形だけでは存在の真の意味、究極的な意味は満たされない。なかなか難しい問題ですけれども、そうした意味に目覚めるのが、本願の教えだと。本願の教えに出会うということは、無限なる大悲に出会うということ。有限なる因縁をお願いするのではない。不可称不可説不可思議と、こう言われているように、我々からはまったく説くこともできない、考えることもできないような大きなはたらきを信ずる。無限なる大悲というものを頼まずにおれなという心が起こってくるということは、そこに無限の意味、つまりこの世を超えた意味がある。本当にこの世の有限性を超えたようなものを願わずにおれない。そういうものが要求されるということなのだと思います。